

あの頃、思い出の現場

雲仙地区砂防激甚災害対策特別緊急工事（Ⅰ工区）

あおみ建設株式会社 執行役員沖繩支店長 長谷川 秀一氏

難工事で味わった仕事の充実感

鹿児島県霧島市出身で1979（昭和54）年、佐伯建設工業（現あおみ建設）に入社した。若い時には「一つの現場に最初から最後まで従事することは少なかった」けれども、「工事が完成した後の充実感は何物にも代え難かった」といい、「全国各地に赴任できることも当時の私には刺激的だった」と話す。



長谷川 秀一氏（はせがわ・しゅういち）
1979（昭和54）年佐伯建設工業株式会社（現・あおみ建設株式会社）入社。西日本地区を中心に港湾工事に従事。2008（平成20）年4月沖繩支店部長、2012（平成24）年4月九州支店営業部長、2013（平成25）年4月沖繩支店長、2016（平成28）年6月執行役員就任。鹿児島県出身。55歳。

直立消波護岸を築造する仕事に取り組んだ。

「着工した93年5月はまだ普賢岳の火山活動は収束していませんでした。火砕流が発生すると昼間でも辺りが真っ暗になり、泥のような雨が降り出します。移動中雨になって前が見えなくなり、何度も途中で止まってフロントガラスを拭きながら現場に向かいました」。

危険と隣り合わせの現場に立つため防災無線を常に持ち歩き、噴火警報に注意し避難対策を考えながら作業に当たった。着工から3

直しを余儀なくされた」といい、「厳しい状況で本当に工事が進められるのか、度々、不安が頭をよぎりました」と当時を振り返る。

度重なる火砕流と土石流の激しさは想像を超え、現場の外周部に設置した延長3キロにも達した汚濁防止膜が土砂に埋まったことも。工事は計画通りに進まないことが多く「変更作業が遅れると製作中の直立消波ブ

ロックの数も確定できないため、幾晩も徹夜したのを覚えています。今はCADがあります。当時の図面は手書き。労力と時間を費やして仕事をしましたが、被災地が少しずつ復旧していく姿を見るのは私にとって大きなやりがいでした」。

近隣の現場では噴火活動に備えて、当時は珍しかった『重機の無人化施工』も行われていた。操作室でモニターを見ながらブルドーザーやバックホウ、ダンプトラックを

操作する。その光景を目にした時、技術革新の重要性を痛切に感じたそう。普賢岳の災害対策に



水無川河口部で実施した護岸築造の様子